



「まちへの触発とシビックプライド～地域博物館の役割」

美濃加茂市民ミュージアム 可児 光生

地域にある資源に光をあてること、そしてその価値や意味合いを市民とともに共有し活用に繋げていくことは、地域に根差す博物館の大きな一番の使命である。このことについて美濃加茂市民ミュージアムの最近の事例から少し考えてみたい。

◇「まちのいいものよいところ山之上展」

そもそも「地域」という概念はどこを指しているのだろうか。美濃加茂市として合併（1954年）する前の旧町村は、70年近くが過ぎた今も一つのコミュニティとして住民意識の中に存在している。それを踏まえ、旧町村である山之上地区（旧・山之上村）を対象を限定した展示を企画した（2017年12月）。地区にある24点のアイテムを絞り込み展示構成をした。土器や貴重な蝶の標本という実物資料とともに紹介したのは、廃道になりかけているかつての通学路「学校道」、農業用ため池の記念碑、昔からつたわる「世間話」などである。それらは地域の暮らしの営みの一部であったにも関わらず、その存在自体が忘れ去られようとしていたものである。これからの引き継いでいく大切なものとして見つめなおしている来館者の姿が展示室にあった。「地域」を語る時、行政単位の市町ではなく、今も息づく小学校区にこそ、そのよりどころとなるベースがあることに気づいた。



◇石仏ツアーからの動き

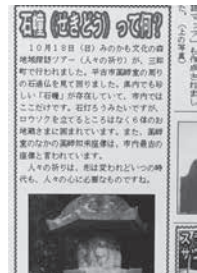
2020年度の常設展示室の「もよう替え」に合わせて、写真パネルで展示されている石仏の実物を訪ねる現地ツアーを開催した（2020年10月18日）。知られざる文化財が身近にあることを伝え、石仏がある現地の空気を感じてもらいた

いというねらいで実施したものである。

市内外の参加者に混じって、該当地区のまちづくり協議会のメンバーが一人参加し、担当学芸員の解説を熱心に聴いていた。その参加者は、「普通」にあるその石仏が、歴史的に貴重な価値があることを初めて知り、それに触発されて地区の「ほこり」としてツアー直後の会の機関紙で紹介してくれた。個人としての気付きが、地域住民としての誇るべきアイデンティティの一つとなって、まちへの触発に繋がって言えば、きっかけとなった博物館の展示やツアーの意義はとても大きなものになる。



石仏ツアーと機関紙記事



市民と地域を結びつけるハブとしての役割がミュージアムにあると考えている。ここに住んでいてよかったと思える「シビックプライド」の醸成のために博物館が果たす役割は大きい。

現在博物館法の改正の議論が進んでおり、先日「博物館法制度の今後の在り方について」として経過報告が公開された(注)。その中で「これからの博物館に求められる役割」の一つに「社会や地域の課題にむきあうこと」が新たに示された。また、今後の博物館振興策として地域における博物館ネットワークの形成が提案された。今後ますます地域と博物館の緊密な関係性、「向き合う」視点と姿勢が問われていくであろう。

(注) https://www.bunka.go.jp/seisaku/bunkashingikai/hakubutsukan/pdf/93293401_01.pdf (2021年9月30日アクセス)

令和3年度 岐阜県博物館協会通常総会 (書面議決)

令和3年度通常総会は、令和2年度通常総会と同様に、新型コロナウイルス感染症拡大防止の観点から、書面表決書の提出による書面議決となりました。また、同日に開催を予定しておりました会員研修会については、上記の理由から、当面延期することとしています。

今年度の通常総会における議題は

- ① 役員の補充について
- ② 令和2年度事業報告及び収入支出決算の承認について
- ③ 令和3年度事業計画及び収入支出予算の決定について

以上の3議題となり、賛成多数によりすべて承認可決されました。また、報告事項として、令和2年度の被表彰者である美濃加茂市民ミュージアムの可児光生さん、令和3年度の被表彰者である岐阜県現代陶芸美術館の守屋靖裕さん、美濃加茂市民ミュージアムの藤村俊さんの表彰を、個別に表彰状と副賞を贈呈するという形で行わせていただくことを報告しました。

今年度事業計画では、活発な情報交流とともに様々な講座や地域に即した事業の開催を目指すため、地域ブロック部会の活動費が昨年度の8万円から10万円に増額されております。また、With コロナ時代を見据え、加盟館の情報集約性の向上や協会としてより効果的な情報発信を行うことを目的とし、協会ホームページを刷新することとしています。これらを含めた事業を通して、事務局といたしましても県内の博物館活動の増進に尽力させていただきたいと思っております。

私は今年度から事務局を担当することとなりました。コロナ禍により各部会活動にも支障が出ているのが現状ですが、会員の皆様の活動を少しでも理解した上で、より魅力的な協会づくりに貢献できればと思っておりますので、よろしく願いいたします。

(岐阜県博物館 松島史弥)

東濃ブロック部会 会員研修会 「古文書料の取り扱い方」

日 時：令和3年2月10日(金)
13:30~15:00
会 場：とうしん学びの丘“エール”
参加者：10名
講 師：山田 晃彰氏ほか

東濃ブロック部会所属施設の学芸員・職員の知識・技能向上のため、日本博物館協会の美術品梱包輸送技能取得士1級資格保持者である山田晃彰氏ほか1名を講師にお招きして、昨年度陶磁資料の取り扱いを学んだのに引き続き、古文書資料の展示・梱包方法等について学びました。

研修の対象としたのは折本、卷子、袋綴じの3種で、実技に用いる資料はすべて講師にご準備いただきました。まずは他の博物館における展示方法について複数の手法を実見し、展示に使用する道具等についても解説していただきました。また、梱包の手法や留意点等についても解説をしていただいた後、実際に資料を手に取りながら、展示手法や道具等について講師に質問できる時間も設けました。



コロナ禍ということで参加人数を制限しての開催となりましたが、7施設(10名)の方が参加し、全員が資料の取り扱いについて積極的に学び、見識を深めることができました。

当該研修会は会員のニーズも高いと思われるため、今後も日本画や洋画の取り扱い方、また写真撮影など、部会員の希望を聞きながら内容を検討して研修会開催を継続したいと思います。

(瑞浪市陶磁資料館 砂田普司)

館・園紹介 No.167

岐阜関ヶ原古戦場記念館

〒503-1501 岐阜県不破郡関ヶ原町関ヶ原894-55

TEL / 0584-47-6070

FAX / 0584-43-0420

URL / <https://sekigahara.pref.gifu.lg.jp>

平成27年3月、岐阜県と関ヶ原町により、関ヶ原古戦場の整備を行うとともに関ヶ原の戦いをより分かりやすい形で発信し、古戦場を中核とする広域観光の推進を図ることを目的とした「関ヶ原古戦場グランドデザイン」が策定されました。その拠点施設である岐阜関ヶ原古戦場記念館が、令和2年10月に開館しました。



櫓をイメージした岐阜関ヶ原古戦場記念館

入館者は、まず1階のエントランスから、戦国時代の合戦名や兵たちの姿が投影されたほどの暗い導入回廊を通り、関ヶ原の戦いの世界へと誘われます。回廊後の空間「グラウンド・ビジョン」(床面スクリーン)で、講談師神田伯山氏の語りを聞きながら、戦いの経緯と合戦当日の流れについて映像を視聴します。続くシアターで、大型スクリーンと椅子に仕込まれた風や振動の演出で合戦当日に紛れ込んだかのような体験をします。以上の体感型アトラクションを終え、2階に上ると、関ヶ原の戦いの歴史に触れることのできる展示室に移動します。

2階展示室1と展示室2は、複製資料と一部の実物資料とで構成されています。関ヶ原の戦いに至る経緯を古文書とパネルで学ぶことが出来るゾーン、肖像画や武具、出土資料などから戦について学ぶことのできるゾーン、絵巻や布陣図から江戸時代以降の関ヶ原の戦いの伝わり方を学ぶことのできるゾーンとに分かれています。展示室3は、世界三大古戦場の展示や、期間限定で実物資料等を展示する特集展示が行われています。なお、年2回各1か月程度の期間を区切って開催される企画展では、展示室2と展示室3を使用して、館蔵や他機関から借用した実物資料等が展示されます。

展示室を抜けると、戦国体験コーナーがあります。複製の刀や火縄銃に触れて大きさや重さを体験したり、陣羽織や刀を身に付け写真を撮影したりすることができます。

360度全面ガラス張りの5階展望室では、古戦場全体を一望することができます。

こうして古戦場を巡る気分を高めたら、1階広域観光情報コーナーで、史跡ガイドの案内やレンタサイクルを申し込むなどして、史跡巡りに出発です。

さて、私が訪れた期間中、2階展示室3で特集展示「石田三成と関ヶ原の戦い」が、3階で石田三成の魅力を紹介するイベント「MEET 三成 in 関ヶ原2021」が開催されていました。

特集展示「石田三成と関ヶ原の戦い」では、西園寺(現・大垣市草道島町)に対して出された慶長5年8月日付池田輝政禁制と慶長5年9月5日付石田三成・小西行長・島津義弘・宇喜多秀家連署禁制が展示されていました。関ヶ原の戦いへと至る過程で、東軍・西軍の攻防が盛んに行われていたことを象徴する古文書です。当古文書の展示機会は、これまでほとんどなかったように思います。この施設の調査・研究活動、そして古文書をお借りする際の調整能力に感じ入るところがありました。館の職員によれば、徐々に近隣からの資料の寄贈や寄託依頼が舞い込んでいるそうです。当該地域の資料の収集・保存機関としての役割が今後、期待されます。

「MEET 三成 in 関ヶ原2021」では、マンガ「ミツナリズム」作者による書き下ろし原画展、長野剛氏による関ヶ原武将イラスト原画展、テレビゲーム「戦国無双」のキャラクターである石田三成の鉄扇展示、滋賀県長浜市・米原市・彦根市や岐阜県大垣市と連携したパネル展示などがありました。別館ショップでは、Twitter「@zibumitunari」とのコラボレーション商品を販売してしていました。これら石田三成に関する複数の個人や団体と連携した企画は、イベント会社からの提案の部分もあったようですが、館の担当者による情報収集と直接交渉の成果によるものも多いとお聞きしました。館の多角的な広報活動には、目を見張るものがあります。

誘客を図るための魅力的なコンテンツが現代社会のどこに転がっているのか、多方面にアンテナを張ることの大切さを改めて考えさせられる施設です。

※本稿は、行政・歴史用語を問わず、「関ヶ原」で表記統一しています。

(奥の細道むすびの地記念館 上嶋康裕)



図書紹介

会員のお薦め図書

美濃加茂市民ミュージアム 藤村俊

『考古基生 齊藤基生著作集』
齊藤基生 著、可児光生ほか編、
発行者 青木清美、2021年発行

本書は、故 齊藤基生氏（1951-2019、以下、齊藤さんとする）の既発表論文類から、選択再録した著作集である。

齊藤さんは、岐阜県多治見市の出身で、(財)豊蔵資料館(当時)で学芸員に職を得、岐阜県博物館協会でも長年にわたり、個人会員を続けておられた。専門は日本考古学であるが、現代社会の様々なモノやコトに強い関心を持ち、思索を深め続けた方である。

その結果、齊藤さんのまなごしは、文化財や美術史、博物館学、文化人類学、民俗学、考現学等をはじめとする様々な学問領域に立脚したものととなり、多様で多くの著作が生まれることとなった。生前、病気が発覚した後に齊藤さんから編さんの委託の希望があり、筆者を含む4名で、その任を務めた。

さて本書(全543頁)は、高校卒業の頃のものから皮切りに全74編が、3部及び終章として収録されている。博物館に関するものに注目すると、第二部に収められている。

「「ホンモノ」ってなあに?」、「子育てと博物館」、「岐阜県博物館事情」、「岐阜の博物館」、「岐阜県博物館 マイミュージアムホールについて」、「岐阜県博物館協会と個人会員」、「学校学芸員制度の提唱」、以上7編である。

初出が本誌『岐阜の博物館』掲載のものも含まれているため、協会の皆様には、印象深い論考もあるのではと思われる。

各部の最後には解題が付されており、著作のポイントが紹介されると共に、齊藤さんの生き様を偲ぶことができる内容になっている。



博物館協会 インフォメーション

意見募集

協会ホームページのリニューアルについて

岐阜県博物館協会ホームページのリニューアルを検討しています。現在のページに加えたほうがよい情報や機能、参考とすべき他の協会のサイトなど、皆様からのご意見、ご要望を事務局までお寄せください(11月30日まで、ご要望等にお応えできない場合もあります)。

岐阜県博物館協会事務局 E-mail
gpmam@mopera.net



編集後記

度重なる新型コロナウイルスの感染拡大を受け、昨年度に続く通常総会の開催取り止めや、各催事の自粛などが後を絶ちません。こうしたなかではありますが、協会員各位の努力によって公開講座の企画・開催など“with コロナ”を踏まえた試みも継続しておこなわれており、当機関紙でも積極的に取り上げていきたいと考えています。今回は、東濃ブロック部会の催事をはじめ、館・園紹介、図書紹介についての原稿をいただきました。

編集：岐阜県博物館協会「こと部会」
発行：岐阜県博物館協会
事務局：〒501-3941
関市小屋名1989(岐阜県博物館内)
(電話) 0575-28-3111
(FAX) 0575-28-3110
(URL) <http://www.gifu-museum.jp/>